

今も輝き続ける「実践」のひと

# 下田歌子

U t a k o S h i m o d a



女子教育のパイオニア、社会的弱者をサポートする社会福祉事業家、  
そして歌人や国文学・家政学者として、  
女性の地位向上への情熱を原動力に幅広い分野で活躍。  
現代につながる功績を残した  
「実践女子学園の創立者・下田歌子」の生涯を見つめる。

# 教育者としての下田歌子

「これからの日本の発展は、女性の活躍がカギ！」  
明治という時代の中で、多くの女性の未来を切り拓く。



男性中心でまだまだ女性の社会進出が一般的ではなかった明治時代。岐阜県岩村の武士の娘に生まれ、18歳で宮中に出仕した下田歌子は、宮中を辞した後、上流階級子女の教育に携わります。さらには明治天皇の皇女の教育を任されることになり、先進国の女子教育の状況を視察するため、1893（明治26）年、単身ヨーロッパへ。独学で語学力を磨きながら、イギリスやフランス、ドイツなど8カ国を見て回るうちに、上流階級だけでなく一般の女子にも教育を授け、女性の地位を高めることがこれからの日本の発展に必要なだと考えるようになります。2年後に帰国すると、その理想を実現するべく行動を開始し、一般女子を対象とした学びの場を日本各地に設けていきました。

## 実践女学校の設立

「自立する力を育みたい」という想いを、  
『実践』の2文字に込め、理想の教育の場をカタチに。

「多くの女性に新たな時代を生きるための教養と自覚を育む」という理想の実現に向けて、1898（明治31）年、歌子は帝国婦人協会を設立します。そしてこの会の事業として、翌1899（明治32）年、東京市麹町区元園町に、実践女学校と女子工芸学校を設立します。これらの学校は、幅広い教養と社会で役立つ学問を授けることで、女性が持つ豊かな可能性を拓き、自立へ導くことを目的としていました。初年度は両校合わせて40名の女生徒が入学。これが本学の記念すべき第一歩となり、ここから2019（平成31）年に創立120周年を迎えるまでに約17万人の卒業生を社会に送り出しました。



▲麹町区元園町（現在の千代田区麹町）時代の実践女学校の生徒たち。

▶校地が手狭になったため、1903（明治36）年、御料地であった渋谷常盤松（現在の渋谷区東1丁目1番地）に移転。



▲2014（平成26）年に開学した実践女子大学・実践女子大学短期大学部渋谷キャンパス。最新鋭の設備を備えた教育拠点に進化。

## 多くの女子教育機関設立・運営に尽力

各地で一般女子向けの教育機関づくりに参画。  
働く女子が学べる夜間学校も設立。



1900（明治33）年には帝国婦人協会新潟支会に裁縫伝習所（設立と同年に新潟女子工芸学校と改称、現在の新潟青陵学園）を設立。順心女学校（現在の順心広尾学園）や淡海女子実務学校（後の淡海実践女学校、現在の淡海書道文化専門学校）、働く女子も学べる愛国夜間女学校など、歌子は各地でさまざまな女子教育機関の設立や運営に携わりました。これらの多くは授業料を低額にするなど、経済的に恵まれない女子や一般の女子が進学しやすいよう考えられていました。



▶新潟女子工芸学校での記念撮影。前列中央が下田歌子。



▲順心女学校 第三回卒業式の記念写真。前列中央が下田歌子。

## グローバルな視野で、海外の女子教育発展にも貢献

女子教育の普及を海外でも。  
留学生の受入れや教師の派遣を行う。

実践女学校は、1901（明治34）年から清国（現在の中国）の女子留学生を受け入れ、1905（明治38）年には清国留学生部を設置します。1914（大正3）年までに清国各省の留学生が就学。その間に卒業した留学生数は200名を超えます。また、上海の務本女学校に日本初の女子教師として河原操子を送り出します。これが縁となって清国肅親王から後宮への女子教師派遣を依頼された際は、実践女学校の教師・成田（木村）芳子を派遣しました。



▲清国留学生（後列の2名が留学生。前列は舎監）。

◀清国のカラチン王妃（前列中央）と成田（木村）芳子（後列右から4番目）。

## column

### 歌子の横顔

### 女官装束で宮殿を訪れ、ヴィクトリア女王と謁見。

欧米教育視察中の1895（明治28）年、下田歌子はイギリス・ヴィクトリア女王に謁見。日本女性の礼服として袴袴を着用し、バッキンガム宮殿を訪れました。独学で磨いた英語力を駆使して話す日本女性に女王も興味を持たれ、その後も何回かに亘って謁見が行われました。

▶英国ヴィクトリア女王謁見の印象を回想し、下田歌子が『ジャバンタイムズ』に寄稿した記事。



# 社会福祉事業家としての下田歌子

「困っている人や恵まれない人に寄り添いたい」  
人々の救済のために寸暇を惜しんで行動する。



「国の発展のためには女性の地位や生活環境を向上させることが必要」と考えていた下田歌子は、社会の動きにも敏感でした。1901（明治34）年、奥村五百子が設立した愛国婦人会に、歌子も発起人の一人として名を連ねます。この会は日清戦争に出征した兵士の遺族や、負傷などにより障がい者となった兵士本人の救済のため、全国の女性の団結と協力を呼びかけるものでした。1920（大正9）年に会長に就任すると、歌子はさまざまな面から社会に貢献できるように、会を改革していきます。そして関東大震災発生時には自ら指揮を取り、会員や実践女学校の生徒を取りまとめて被災者の救援活動を行うなど、愛国婦人会を拠点にさまざまな社会活動を展開しました。

## 愛国婦人会での社会貢献活動



女性の力で、社会をより良くするために。  
会を改革し、多彩な社会貢献活動に乗り出す。

愛国婦人会設立後、評議員を務めていた歌子は、設立者亡き後の1920（大正9）年、第5代会長に就任。上流階級の婦人を中心に結成された愛国婦人会は、約100万人の会員と莫大な資金を抱えていましたが、指導者に恵まれず、活動が行き詰まっていた。そこで、歌子は会の活動を社会救済事業に広げ、さまざまな慈善事業に取り組んでいきました。

## 全国での講演活動

全国各地に足を運び、女性の活躍を呼びかけ共感を広げる。

下田歌子は、一般女子教育の普及を目指して全国で講演会を開催しました。また、工女の待遇改善のため信越地方の製糸工場に足を運ぶなどの視察活動も行いました。こうした活動は多くの一般女性たちの共感を呼び、講演会場はいつも満員だったと伝えられています。



▲ 1921（大正10）年9月、盛岡市での講演会の様子。中央奥が下田歌子。多くの女性が会場に詰めかけている。

〈下田歌子が講演会を行った地〉



## 関東大震災での救援活動

### 救護施設を設け、炊出しして物資を配布。 自ら先頭に立ち罹災者の救援を行う。

1923（大正12）年9月1日、罹災戸数約69万戸、死者行方不明者10万人超の大災害となる関東大震災が発生。歌子はまず自ら内務大臣邸に足を運んで正確な情報を集め、陣頭指揮をとって救援活動を展開。医師・看護師4名が常駐する臨時救護班をつくり、全国の支部に救援品の提供を呼びかけ、近辺の罹災者に炊出しを行いました。そして会員や実践女学校の生徒たちが縫った200万着の衣類と、全国から届いた慰問救援物資を荷車に積み、罹災者に配布して回りました。



▲救援本部で指揮をとる下田歌子  
（写真中央）。

◀下田歌子の精神を引き継ぎ、2011（平成23）年の東日本大震災の時には中学校高等学校の生徒から被災地に制服などを寄贈。また、大学・短期大学部では、岩手県宮古市を支援する学生によるボランティアを継続的に行っている。

## その他の社会活動

### 多くの女性に「働く場」を紹介し、「学ぶ場」を提供。 幅広い活動で女性の自立を後押し。

このほかにも歌子は、愛国婦人会本部に夜間女学校や婦人職業相談所および児童健康相談所を、地方支部には保育所や職業紹介所を新設。女性や子ども、障がいのある方々のために活動を行いました。その活動は、現在の社会福祉活動への道を切り拓く先進的なものでした。

▶下田歌子が東京府知事に提出した、  
愛国夜間女学校の設立認願。



## column

### 歌子の横顔

### 女子学生なら誰もが憧れる「袴」を考案。

現在、大学や短期大学の卒業式で多くの学生が身につける袴は、下田歌子が考案したものがルーツと言われています。歌子はこれを携わっていた華族女学校の制服として採用した後、実践女学校でも「校服」として用いました。実践女学校では「授業服」または「校衣」と呼び、毎年在校生が縫い、新入生に贈る習わしがありました。

▶校服を着た実践女学校の生徒。



# 表現者・研究者としての下田歌子

とび抜けた才能で芸術・学問分野でも活躍。  
優れた作品や研究成果を数多く世に送り出す。



並外れた行動力で一般女子教育の普及に取り組み、社会をより良くするための活動を展開した下田歌子は、明治時代を代表する歌人でもありました。その萌芽は早くも幼少時代に現れており、子どもの頃に詠んだ和歌がいくつも残っています。故郷・岩村から上京し、宮中に出仕した際は和歌の才能を皇后に愛され、「歌子」の名を賜ったほどでした。

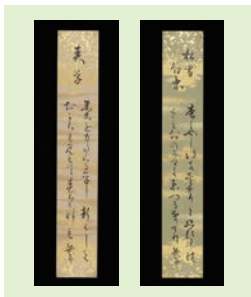
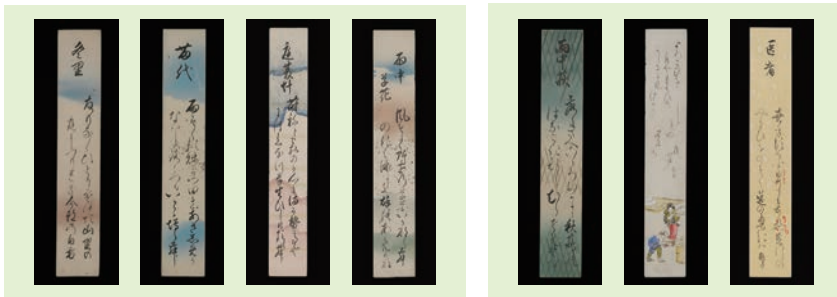
研究者としての功績も多く、国文学では特に『源氏物語』研究に定評がありました。家政学についても熱心に研究に取り組み、女性の手による初めての家政学の専門書として1893（明治26）年に『家政学』上下巻を刊行しました。国文学・家政学における研究成果は、本学の「知」の礎となって現代にも息づいています。

## 和歌づくり



出世のきっかけをつくった和歌の才。  
幼少期から晩年まで、優れた歌を詠み続ける。

幼少時から卓越した和歌の才能に恵まれていた歌子は、加藤千浪に加え、1871（明治4）年に上京すると八田知紀といった優れた歌人のもとで和歌を学びます。1872（明治5）年、八田らの推挙により宮中に出仕し、女官として皇后（後の昭憲皇太后）に奉仕。歌会で「春月」という題をいただき、「手枕は 花のふぶきに埋もれて うたたねさむし 春の夜の月」と詠み、その才能を皇后に愛でられ、「歌子」の名を賜るきっかけとなりました。宮中を辞し教育の道に入った後も、歌子は歌会などを通じて教え子たちと歌の道を楽しみ、晩年に至るまで多くの歌を残しました。



▲下田歌子直筆の和歌。幼少期（左上）、  
宮中奉仕時代（右上）、壮・晩年期（左下）  
のもの。豊かな感性と高い教養が感じられる。

▶下田歌子著作集『香雪叢書』  
全5巻。第2巻の『歌集 雪の  
下草』（1932（昭和7）年2月刊）  
には、歌子自身が選んだ和歌が収  
められている。

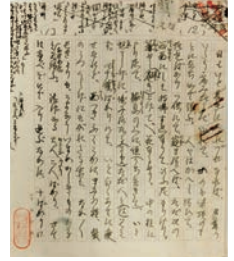


深い学識と独自の視点に基づく論説は高く評価され、坪内逍遙の講義と並び称されることも。

優れた和歌を作るには、源氏物語などの日本の古典作品に広く通じていることが必要とされます。歌子は幼い頃から積み重ねた教養により、若くしてそれを備えていました。後に歌子が行った『源氏物語』講義は、早稲田大学での坪内逍遙の『シェークスピア』講義と並び名講義で、女学校の生徒以外にも多くの聴衆を集めました。実践女子大学では、『源氏物語』の教育・研究が伝統として受け継がれ、平成30年度文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に『源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成』事業として選定されました。



▲『源氏物語』講義の様子。「ぜひ聞きたい」と多くの聴講生が集まった。



▲下田歌子直筆の源氏物語講義草稿。より良い内容とするため妥協せずに試行錯誤していた様子うかがえる。

## 家政学研究

衣食住から育児、家計まで。  
家庭を運営する家政の質の向上を目指す。

歌子が著した『家政学』上下2巻は、女性の手による日本初の家政学専門書です。上巻では家事経済と衣服、飲食について、下巻では住居、災害への対処、礼法、化粧、看護、子どもの教育などを取り上げました。衣服では今日の被服学、飲食では食物学を網羅するほど、多彩な内容が収められています。このように幅広い内容をまとめたのには、歌子の「家政は家の政（まつりごと）で、国政と同じくらい重要」という信念が込められていました。



▲日本初の専門書として1893（明治26）年に刊行された『家政学』。



▲下田歌子の手による『家政学』の原稿。

## column

### 歌子の横顔

歌子の名は広く知れ渡り、さまざまな文学作品に登場。

森鷗外『青年』に下田歌子をモデルとした高島詠子という女性が登場するほか、三宅花圃『藪の鶯』には優れた教育を行う人として歌子の名が挙げられています。歌子の人柄や功績は広く知られており、同時代の作家たちからの関心の高さがうかがえます。

▶作品に登場する高島詠子は、これまでにない女性として、主人公・純一に強い印象を与える。



## 下田歌子略年譜

| 年             | 年齢<br>(満年齢) | 出来事  |
|---------------|-------------|--|
| 1854 (安政元) 年  | 0           | 現在の岐阜県恵那市岩村町に、旧岩村藩土平尾録藏の長女として生まれる (8月8日: 戸籍上は8月9日)。幼名は鉦 (せき)。  |
| 1870 (明治 3) 年 | 16          | 父録藏、明治政府より宣教使史正の職を得て上京。  |
| 1871 (明治 4) 年 | 17          | 鉦上京 (4月8日)。八田知紀、加藤千浪に和歌を学ぶ。                                    |
| 1872 (明治 5) 年 | 18          | 宮中に出仕。和歌の才能を愛でられ、皇后より「歌子」の名を賜る。                                |
| 1879 (明治12) 年 | 25          | 宮中を辞す。   |
| 1880 (明治13) 年 | 26          | 下田猛雄と結婚。   |
| 1882 (明治15) 年 | 28          | 私立下田学校 (後の桃夭学校) を創設して、上流子女の教育に当たる。                             |
| 1884 (明治17) 年 | 30          | 夫猛雄没。華族女学校創設の任に就く。   |
| 1885 (明治18) 年 | 31          | 華族女学校開設。幹事兼教授に就任。  |
| 1893 (明治26) 年 | 39          | 『家政学』2巻を刊行。欧米各国の女子教育状況視察のため渡欧。                                 |
| 1895 (明治28) 年 | 41          | 英国ヴィクトリア女王に拝謁。帰国。華族女学校学監に復職。                                   |
| 1898 (明治31) 年 | 44          | 帝国婦人協会を結成、会長に就任。   |
| 1899 (明治32) 年 | 45          | 帝国婦人協会私立実践女学校と女子工芸学校を東京市麹町区元園町に開設、校長に就任。                       |
| 1903 (明治36) 年 | 49          | 実践女学校、女子工芸学校を渋谷に移転。  |
| 1906 (明治39) 年 | 52          | 華族女学校が学習院に併合され、学習院女子部となる。学習院教授兼女学部長に就任。                        |
| 1907 (明治40) 年 | 53          | 学習院を辞す。  |
| 1908 (明治41) 年 | 54          | 実践女学校の全財産と私財を寄付し、財団法人帝国婦人協会実践女学校を組織、理事に就任。実践女子附属幼稚園を設立し、園長に就任。 |
| 1920 (大正 9) 年 | 66          | 愛国婦人会第5代会長となる。   |
| 1923 (大正12) 年 | 69          | 関東大震災発生。愛国婦人会と実践女学校を中心として被災者救援活動を行う。                           |
| 1929 (昭和 4) 年 | 75          | 実践女学校に附属夜間女学校を設置。  |
| 1935 (昭和10) 年 | 81          | 岩村の生誕地跡に顕彰碑が竣工され、除幕式に参列。                                       |
| 1936 (昭和11) 年 | 82          | 10月8日没。享年82歳。  |

学校法人 実践女子学園 (経営企画部) 〒191-8510 東京都日野市大坂上 4-1-1

TEL 042-585-8804 FAX 042-585-8808